

## 研究ノート

守弘仁志君と私  
—『若者論を読む』のころ—

小 谷 敏

昨年(2019)の9月、守弘仁志君の訃報に接した時、長年の友人を亡くしたにも関わらず、実感は伴いませんでした。突然の友人の死は誰にとっても受け容れ難いものです。彼が遠隔の熊本で亡くなり、一人暮らしの突然死であったために、情報が錯綜したこと。そして何よりも、彼を見送ることができなかったことが、それに拍車をかけました。守弘君の死は残念なことではあります。しかし、また別の思いが、かつて白血病という大病を患った筆者にはあります。病気とその治療はとても苦しいものです。守弘君は25年以上も、身体の不調に苦しんできました。守弘君が、その苦しみから解放されたことに、友人として安堵している部分があることも否定できません。

筆者は、1979年に中央大学大学院文学研究科社会学専攻に入学し、佐藤智雄先生に師事した守弘君の同期生です。一人の友人の立場から、人間としての、そして社会学者としての守弘君の一面をここでは綴らせていただきます。

## 1. 守弘君との出会い

## (1) 大学院に入るまでのこと

話が私事に及んで恐縮ですが、私は早稲田大学の政治経済学部出身です。政治学科に所属していましたが、政治学にはおよそ興味がもてませんでした。筆者が在学していた当時はオイルショック後の就職難の時代ではありましたが、そもそも大企業で働く自分を想像することもできませんでした。ただ学部時代に、正岡寛司、秋元律郎、須里茂の各先生の社会学の授業を聴講し、また作田啓一先生や井上俊先生のご本を読んで、社会学はなかなか面白そう

だと思い始めました。社会学の大学院に進もうと思ったのは、大学4年の夏になってからのことでした。佐藤智雄先生のことは、セバスチャン・デ・グレーシアの『疎外と連帯』の訳書によって知っていました。規範の崩壊が緩慢に進む「慢性アノミー」と、それまで信じていた信念体系が瞬時に崩れしまった時に生じる「急性アノミー」という区分は非常に新鮮なものに感じられたのです（Grazia1948＝訳1966）。

しかし、夏休みもだらだらと過ごして終わり、受験勉強らしいことは何もできませんでした。社会学全体についてのイメージは何もありません。大学院入試の時、後ろの席にいた眼鏡をかけて温厚そうな、やはり佐藤ゼミを志望しているという受験生に、「社会学っていったいなにやるの？」と訊いたほどでした。その温厚そうな受験生というのが、守弘君だったのです。

試験では、ウエーバーとマルクスについて比較せよという問題が出ました。これは政治学でもよく出てくる論点でしたから、解答することに大きな苦勞はありませんでした。他にも「たまたま知っていたこと」がいくつか出て、筆者は試験をクリアすることができました。中大大学院への進学が決まったのです。ご挨拶に成城学園の佐藤先生のお宅にうかがった時に、先生は、「君ともう一人入ってくる者がいるのだが、彼の成績はびっくりするぐらいよかった」とおっしゃっていました。ああ、あの温厚そうな彼はものすごく優秀なのだったものでした。

## （2）往時の中大社会学専攻

1970年代末の社会学の世界では、パーソンズ理論が支配していて、それに対抗する、諸理論との論争がさかんに行われていました。シュッツをはじめとする現象学的社会学や、シンボリック・インタラクショニズム、さらにはエスノメソドロギー等々、「解釈学的パラダイム」と呼ばれる諸学派が台頭し、従来の支配的パラダイムであった、パーソンズのシステム論的思考に異を唱えていたのです。筆者自身、どう考えてもシステム論は肌に合わないので、「ハーバードの機械論者」を厳しく批判するシンボリック・インタラクショ

ニズムに興味をもち、その源流であるジョージ・ハーバート・ミードを、修士論文の研究テーマに据えることにしました。

そのパーソンズが、筆者と守弘君が大学院に入った直後の1979年の5月8日に、突然亡くなりました。その後の数日は、社会学の共同研究室で、「パーソンズが亡くなりましたね」ということばが、挨拶のように飛び交っていたのです。一般社会では、パーソンズの死など誰も関心をもってはいません。後戻りのきかない、非常に特殊な世界に足を踏み入れてしまったことを実感させられた次第です。

当時の中大社会学には、佐藤先生の他、社会病理学的那須宗一先生、地域社会学の島崎稔先生。パーソンズ研究で知られる田野崎昭雄先生、若手では東欧研究の石川晃弘先生、政治社会学の川崎嘉元先生等々、錚々たるスタッフが揃っていました。

田野崎先生の授業では、パーソンズの解説書を英語で読んでいました。そのテキスト自体の英語は平易なものでしたが、引用されているパーソンズのそれは大変に難解なものでした。それを守弘君が、すらすらと訳していた姿が印象に残っています。

後に熊本学園大学で守弘君と同僚となる大野哲夫先生は、佐藤ゼミの先輩にあたる方です。大野先生と筆者と守弘君の3人で、新宿歌舞伎町近くのルノアールに集まり、ミードの『精神・自我・社会』の読書会をしたことは、よき思い出です。

また大学院生時代には、佐藤先生の門下生を中心とする研究グループは、文部省（当時）科学技術研究費を得て、青森県むつ市と、長崎県佐世保市で、原子力船「むつ」母港化と地域社会の変容というテーマで大規模な地域調査を行っていました。膨大な実務を大学院生であるわれわれが担当したのですが、事務能力が皆無に等しい筆者の尻拭いを、延々と守弘君にさせてしまったという強い悔いを、いまだに筆者は抱いています<sup>[1]</sup>。

## 2. 「しらけ世代」の「モラトリアム人間」—社会学者、守弘仁志の出発

### (1) 「しらけ世代」—豊多摩高校の青春

筆者も守弘君も、1956年生まれ。早生まれの守弘君は1学年上になります。世代論のくくりでいえば、大学紛争を戦った「団塊の世代」の次にあらわれ、「しらけ世代」とも「3無主義」ともよばれた、いささか活力に欠ける世代の一員です。大学紛争の熱気が過ぎ去ったあとの、しらじらとした時代の空気を感じながら育っていった世代でもあります。

守弘君は東京都立豊多摩高校を経て、中央大学文学部の社会学専攻（当時は哲学科社会学専攻でした）に進んでいます。豊多摩高校出身の著名人としては、詩人の谷川俊太郎、作家の橋本治、そして東大出身のプロ雀士桜井章等がいます。そのユニークな顔ぶれが示すように、自由な校風の学校です。筆者は守弘君の高校時代の思い出話を聞くのが好きでした。同校には校則が一つしかなく、それが「ソフトクリームを学食以外の場所で食べると、罰として校庭を後ろ向きに走って一周しなければならない」というものだと言っていました。地方の管理主義的で進学至上主義の高校を出た筆者は、自由な守弘君の高校時代に羨望の念を覚えたものです。守弘君の自由で柔軟なあの発想力は、高校時代に培われたものなのでしょう。

### (2) 「モラトリアム人間の時代」

筆者と守弘君は後年協力して、『若者論を読む』という本を作りますが、筆者が学部生時代の、1977年と78年には、多くの優れた若者論が刊行されています。笠原嘉『青年期』（笠原 1977）、井上俊『遊びの社会学』（井上 1977）、小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』（小此木 1978）等々です。「カプセル人間」論を唱えた中野収らの『円盤に乗ったコミュニケーション』もこの中に含めてよいでしょう（中野・平野 1977）。この当時は、「一億総中流」ということが流行していました。豊かな社会の中で若者は、大人になることを忌避するようになった。大学紛争当時のアクティブな若者像から、三田誠広が『僕って何』（三田 1977）で描いてみせた、内向的で幼い若者像へ。「団

塊の世代」からの若者たちのあまりの変りようが、こうした若者論の需要を生み出したのでしょう。

このうちもっとも社会的なインパクトをもったのが、小此木啓吾の『モラトリアム人間の時代』だったのではないのでしょうか。モラトリアムということばは、E. Hエリクソンに由来しています。エリクソンは、アイデンティティの確立を青年期の発達課題としてあげています。青年期に若者は、生涯にわたってコミットする、価値観と社会的役割を見出すことが求められているというのが、アイデンティティということばによって、エリクソンが言わんとしたことです。モラトリアムとは、アイデンティティの確立のために、若者が社会的役割に就くことを免除され、様々な役割実験を行う期間のことを言います。

小此木は、モラトリアムの変質を指摘しています。モラトリアムとは、本来、若者が大人になるための過渡的な期間でした。ところが豊かな社会に育った現代の若者たちは、親の仕送りやアルバイトによって、十分豊かな生活を享受することのできるモラトリアムの永続化を図っている。拘束的な大人の世界に参入するよりも、自由なモラトリアムにとどまることを夢見ている。これが『モラトリアム人間の時代』における小此木の主張です（小此木 1978）。

モラトリアム人間増大の証拠として、小此木は、大学院進学者の増加や長期留年学生が存在をあげています。たしかに先に述べたように、筆者の場合には大学院進学をきめたいきさつは、いきあたりばったりのもので、「モラトリアム延長」と断じられても仕方ありません。しかし70年代の後半は、後年の就職超氷河期に匹敵する就職難の時代でした。就職難から逃れるべく、「入院」（当時文系大学院への進学はこう評されていました）し、あるいは長期留年（当時は学費が安く留年することが容易だった）の道を選んだ者も、少なくはなかったのです。もし高度経済成長期のように、就職が好調であれば、筆者も守弘君もまた違った人生を歩んだ可能性は否定できません<sup>(2)</sup>。

### （3）社会学者、守弘仁志の出発

守弘君は、現天皇によく似ていたことから、「殿下」と仲間内では呼ばれていました。守弘君は、非常に学力が高く、とても勉強をすることが好きな人でした。しかし、温厚な「殿下」は、人を蹴落としても競争を勝ち抜く野心とは無縁な人でした。非常に優秀でありながら、守弘君が大学のポストを得るのに苦勞した一つの大きな要因であろうと思います。

守弘君は、日本の放送制度、とりわけ地方民放の発展過程という地道な研究テーマを設定しました。佐藤先生は、シカゴ学派のロバート・エズラ・パークや、機能主義のロバート・K・マートンには通暁しておられましたが、社会学の世界で認知されるのが遅かったミードは、それほど読んではおられません。その分筆者には自由に研究できる場所がありました。しかし守弘君のテーマは、地域メディアの研究を長年続けてこられた佐藤先生や、ゼミの先輩たちと重なるところが大きく、独自性を打ち出すために、彼はとても苦勞をしていました。

修士時代に、彼の中で研究者を目指す気持ちは、薄らいでいたようにみえました。当時は、30代の半ばまで就職の決まらない、いわゆるオーバー・ドクターが、ゼミの内外の先輩たちにたくさんいました。守弘君は、先のみえない学者修業を続けることにためらいを感じている様子でした。

修士論文（守弘 1981）を書き上げた後、守弘君は博士後期課程には進まず、さる業界紙に就職しています。業界紙では、入社間もない時期に大きなスクープ記事を書き、社長賞をもらっています。その「賞金」でござってもらったことは、懐かしい思い出です。守弘君は、優れたジャーナリズムにもなりえた人だと思います。しかし大学院を一度離れたことによって彼は、自分が一番やりたいことは研究だということに、ようやく気づきます。修士課程の3年間と、新聞記者時代の1年間は、彼にとっての延長されたモラトリウムだったのかもしれません。

1983年、守弘君は再び中央大学大学院に戻ってきました。社会学者、守弘仁志の出発です。この時から、終生、彼は地域メディア論やマス・コミュニ

ケーション理論、そして若者論等々の幅広い領域にわたって旺盛な研究活動が続けることになります<sup>(3)</sup>。

### 3.『若者論を読む』のころ

#### (1) 若者文化に淫した日々

守弘君は、実に多才かつ多趣味の人でした。学部生時代には、鉄道研究会（鉄研）に所属していました。いわゆる「鉄ちゃん」です。生涯、鉄道模型の収集を続け、膨大な数のプラモデルが遺されたはずです。鉄研時代には、山手線で「押し屋」（満員電車で客を押し込む）のアルバイトをしていました。お酒に酔うとどこからか知れず取り出したホイッスルを吹きながら、「さあ、お客さん、前に、前に！」という「押し屋」のパフォーマンスを始めるのが常でした。1984年の3月、植村貴裕君（元立正大学）と3人で、東北地方のさる国鉄路線のサヨナラ列車に「乗りテツ」をしたことが、懐かしく思い出されます。旅行、写真、釣り…。80年代の前半には、そのことばはまだあまり知られていませんでしたが、紛れもなく守弘君は多方面にわたる「オタク」だったのです。

オタク的な趣味嗜好を強くもっていたのは、守弘君だけではありませでした。植村君、岩佐淳一君（茨城大学）、遅れて大学院に入ってきた早川洋行君（名古屋学院大学）と梅津顕一郎君（宮崎公立大学）、さらには東洋大学の大学院生でありながら、われわれのグループに加わった新井克弥君（関東学院大学）までもを含めて例外なく、この当時『ビッグコミック・スピリッツ』に掲載されていた「めぞん一刻」の熱心な読者だったのです。アイドル好きもこのメンバーには共通していて、酒の席での話題には、ミードやマクルーハンやジンメルに関する事柄より、河合奈保子と松田聖子のどちらがよいかなど等の主題に、はるかに大きなエネルギーと時間とが費やされていたのです。マンガやアイドルの議論に淫することなく、もう少しあのころ勉強していれば（他の諸君はしていたのでしょうか）という後悔はありますが、筆者も守弘君も1980年代の若者文化にどっぷりと浸っていたのです。『若者論

を読む』の執筆メンバーは、197,80年代の若者たちです。その意味でこの本には、当事者研究の側面があると述べても過言ではないでしょう。

様々な大学や専門学校で教え、若い世代と接触をもつことによってさらに、筆者たちの若者文化への耽溺は一層進んでいくことになります。守弘君を中心とするこのグループが、若者研究へと向かったことは、理の当然とさえ思えます。そしてリアルな若者たちと接触する中で、守弘君たちは、当時流行りの若者論に対して、強い疑問をもつようになったのです。1980年代の末から守弘君たちは、彼らの眼前の若者たちに対してビデオ視聴に対するアンケートを繰り返し行っています。そこで浮かび上がってきたのは、その当時支配的だった「若者は情報高感度」という言説とは、似ても似つかぬ、若者の実像でした。

## （２）「新人類」と「オタク」－1980年代の若者論

1980年代の日本は、オイルショックの痛手を脱して、バブルへと至る好景気を享受していました。そうした時代相を反映し、若者像も大きく変容していきました。当時は、「新人類」なる若者像が喧伝されていました。この時代には、1960年代に生まれた若者たちが、新入社員として会社に入っています。彼らに残業を依頼し、上司との「ノコミュニケーション」に誘っても、彼彼女とのデートを優先して帰ってしまう。これまでの日本人の常識の通用しない、「新人類」として当時の若者たちは語られていたのです。彼らのこうした行動様式は、メディアとの関連で説明されていました。60年代生まれの「新人類」は、テレビのある環境に生まれてきた世代です。メディアとの親和性の高いこの世代の若者は、当時職場に姿をみせつつあったワープロ、パソコン等々のメディアを巧みに使いこなすが、生身の人間とつきあうことは苦手としている。こうした若者像を広める上で力のあった中野収は、新人類世代の若者たちを「まるで異星人（エイリアン）」（中野 1986）と揶揄しています。

この当時の若者たちは、その非常識な振る舞いが大人たちから指弾されて



ただけではありませんでした。消費と情報のフロンティアを切り開く、センス・エリートとしての期待ももたれていたのです。当時「朝日ジャーナル」の編集長だった筑紫哲也は、秋元康、辻元清美、浅田彰等々、様々な世界で活躍する新しい才能にスポットライトを当てた「新人類の旗手たち」という連載によって、このことばを広めていきました。1986年に「新人類」は、新語流行語大賞に輝いています。

「新人類」ということばに託されたのは、80年代の消費資本主義の波に乗って、また当時発達しつつあった新しいメディアの恩恵を十二分に享受しながら、その欲望を満足させていった若者たちのイメージでした。当時は、クリスマスイブの都心のシティホテルは、予約でいっぱい。有名女子大の門前には、ブランド大学の学生が乗った高級外車が列をなしていました。「新人類」は、消費資本主義の時代の「勝ち組」だったのです。

「新人類」の対極にある若者像として語られていたのが、「オタク」です。もともとサブカルチャーの世界でひそかに広まっていたこのことばが、人口に膾炙するきっかけとなったのが、1988年から9年にかけて東京と埼玉で起きた、連続幼女殺害事件でした。凶行の舞台ともなった犯人・宮崎勤の自室の8畳間の壁は、特撮もののテレビ番組を収録したビデオで埋め尽くされていたのです。その非社交的な性格のために消費資本主義から疎外され、ビデオという新しいメディアに耽溺することによって、現実と虚構の区別がつかなくなってしまった「オタク」は、消費資本主義の時代の「負け組」として、語られていたのです。

### （3）「虚構としての新人類論」

『若者論を読む』（小谷編 1993）は、先に述べた守弘君たちのビデオ調査の副産物として生まれています。1980年代の若者論が、実際の若者像からあまりにも乖離していることに呆れた守弘君たちは、1970年代と80年代に刊行された様々な若者論を俎上に乗せて、その真偽のほどを検証し、一冊の本として刊行するという野心を抱いたのです。

このグループの基本的な考え方は、守弘君が、『若者論を読む』に寄せた、「情報新人類の考察」によく示されています（守弘 1993）。守弘君は、70年代にいち早く若者のメディアとの親和性に注目した、中野収らの「カプセル人間論」を高く評価しています。ラジカセやビデオデッキ、カーラジオ、ウォークマン等々のメディアに囲まれることによって、若者たちは外界と直接触れ合うことなく、多様な情報を手にいれることが可能になりました。メディアの力によって個室や自動車、そして移動中の身体は一つのカプセルになります。カプセルは外界から自己を守る「殻」と同時に、情報を取捨選択する「フィルター」としても機能しています。カプセル人間論はメディアが若者を「孤立」させる側面を強調しています。しかし、深夜放送のリスナー同士の結びつきが示すように、カプセル人間たちは、メディアを通して連帯をしている。メディアを介しての「孤立」と「連帯」というカプセル人間の両義的な性格を描き出した点で、守弘君は『カプセル人間』を高く評価しています。

80年代に入ると「情報新人類」言説が語られるようになりました。80年代には、様々な新しいメディアが出現します。秋葉原のパソコンサップでは、大人たちがみたこともないような機械（パーソナル・コンピュータ）を、暗号めいた符号を操って操作する「コンピュータ新人類」の姿が目立つようになりました。新しいメディアに弱い大人たちは、そうした若者に畏怖の念を覚えます。そして1985年の「つくば科学博」を機に情報社会の到来が喧伝されるようになると、新しい情報機器を自在に使いこなし、メディア（とりわけテレビ）からの情報を能動的に受容する若者像を語る、識者たちがあらわれました。

しかし、こうした若者像は、1989年の宮崎勤事件で暗転しています。そしてメディアへの耽溺が、若者たちのメンタルに対して、負の影響を及ぼしていることが喧伝されるようになります。こうした若者像の暗転は、「情報新人類」として若者を過剰にもちあげた反動として生じたと守弘君は言います。若者たちの多くは情報高感度でもなければ、メディアからの情報を能動的に

摂取しているわけでもない。一部のセンス・エリートの姿が若者全体に拡大され、誤った若者像が生まれたと守弘君は指摘しています。

守弘君たちの行ったビデオ調査は、新人類論を「虚構」と断じています。(新井・岩佐・守弘 1993) 彼らは調査で得られたデータをもとに、若者たちの情報行動の「凡庸さ」を浮き彫りにしていったのです。守弘君たちが、大学や専門学校で日々教えている普通の若者たちを置き去りにした新人類談議に、彼らは強い抗議を行っています。

#### (4) 出版までの苦闘

筆者がこのグループに加わったのは、本の企画が立ち上がった後のことでした。筆者は大学院生時代にミードの自己論との関連で、E. H. エリクソンのアイデンティティ論にも関心をもっていました。小此木啓吾であれ、栗原彬であれ、井上俊であれ、70年代の若者論者は、例外なくエリクソンを参照しています。エリクソンが70年代若者論に及ぼした影響を論じて欲しいというのが、守弘君たちからの筆者への要望でした。

『若者論を読む』というタイトルも、筆者が研究グループに加わる以前から決まっていました。岩佐君と新井君が、千葉県農道(!)をドライブしていた時に、どちらからともなく、「この本のタイトルは、『若者論を読む』で行こう!」という声が上がったと聞いています。彼らの脳裏には、当時ベストセラーになっていた、丸山眞男の『文明論の概略』を読む』(丸山 1986) があったようです。

当初の構想では、第一部において、岩佐君が規範主義的で発達心理学に依拠した「青年論」が、メディア論や消費社会論と相性のいい、「若者論」にどのように変容していったのかを跡づけ、筆者が1970年代の若者論にエリクソンの及ぼした影響を考察する。そして第二部においては、ビデオ調査をベースとしながら、新井君と守弘君が80年代の様々な若者論を俎上に乗せ、さらにマクルーハン等のメディア論が、若者論の中でどのように援用されていったのかを論じていく。そうした構想を基に、1991年の筑波大学での日本

社会学会大会で、筆者と守弘君たちのグループは一つの部会をたて、高橋勇悦教授（当時東京都立大学）の司会のもとで報告を行いました。

『若者論を読む』をどの出版社から出すのか。この問題に筆者と守弘君たちは突き当たります。当時辛うじて出版社との接点があったのは、メンバーの中で筆者だけでした。1989年に出版された片桐雅隆編著『意味と日常世界』（片桐編著 1989）に掲載された筆者の論文は、『ソシオロジ』誌の書評において、森下伸一先生からの好意的な評価をいただいていた（森下 1990）。そこで片桐先生を通して、世界思想社の当時新進気鋭の編集者であった中川大一さんに、筆者の書いた企画書が渡していただいたのが、筑波大学での学会の時でした。

最初この企画に対する世界思想社内部の反応は冷ややかなものであったと聞きます。当然のことでしょう。当初の執筆メンバーの中で、助教授（当時）は筆者だけ。他のメンバーは専任か非常勤の講師。筆者も含めて、誰一人として、みるべき研究成果を残している者はいませんでした。しかも「若者論」ならまだしも、若者についての言説をあげつらう「若者論論」！誰がどうみても、格式ある出版社が採用してくれそうな企画ではありません。

中川さんは一計を案じ、当時京都大学の教授であった井上俊先生に企画書を見せます。企画書を一読して井上先生は、「これはいい本になる」とおっしゃったそうです。井上先生のことばには重みがあります。助教授クラスのメンバーを二人加えることを条件に、この企画は認められました。

二人の助教授として、東北学院大学の片瀬一男さんと、鹿児島大学の城戸秀之さんに加わっていただきました。片瀬さんには、コールパークとの比較においてエリクソン理論の内在的な検討をお願いしました。城戸さんには、バタイユやボードリヤール等の消費社会論が、日本に受容された過程の知識社会学的分析をお願いしました。糸井重里等、80年代のマーケッターたちの言説の分析をするために、そうした世界の動向に詳しい、植村君にも加わってもらったのです。こうして70年代の青年論から若者論への転換、消費社会の若者たち、メディアと若者という三部構成の骨格が固まりました。当時ま

だ大学院博士課程の学生だった梅津君には、若者と若者論に関する詳細なフローチャート年表の作成をお願いしています。

こうして『若者論を読む』は様々な曲折を経た末に、予定より一年遅れて、1993年の秋に刊行されました。紆余曲折の一つには、1992年の秋、東京に帰っていた守弘君が腎臓の病気で倒れ、入院したことがあります。幸い、この時はほどなく退院し、無事原稿を書き上げることもできました。しかし、この時守弘君は、生涯の宿痾となる難病を抱え込むことになったのです。

#### 4. 『若者論を読む』の後

##### (1) 『若者論を読む』が遺したもの

幸い『若者論を読む』は好評を博し、5版7000部の販売実績を残すことができました。本書が若者論についての分析、すなわち若者に関するメタ社会学という新しいジャンルを築いたと述べても、自惚れとは言われたいでしょう。2000年代に、少年犯罪の「急増」や、フリーターの増大を背景に若者バッシングが盛んになった時、エビデンスを無視した一連の言説を「俗流若者論」と断じ、厳しい批判を加えた論客に後藤和智がいます。彼が仕事を進める上で、本書は大きな支えとなったと聞いた時には、大変うれしく思いました(後藤 2008)。

これは中川さんを通して聴いた話ですが、井上先生は、『若者論を読む』について、こんなことをおっしゃっていたそうです。「統計的平均と合致するような若者像を語っていないから、その若者論は虚偽だという論調には賛同できない」。統計上の外れ値のような存在を持ち出して、「これがいまの若者!」と一般化することは、守弘君たちが指摘したように、大きな間違いです。しかし、統計上の少数者の中に、将来の若者たち、ひいては日本社会の中で一般化していくような、新しい心性や行動様式が胚胎している可能性も否定できません。それを「虚偽」と断じて切り捨てることにも、やはり問題はあるでしょう。

筆者は井上先生の批判を重く受け止めました。2017年に筆者は、『若者論

を読む』の続編ともいうべき、『21世紀の若者論』を刊行しています（小谷 編著 2017）。その中に少年犯罪を取り上げた一章を設けました。その章を担当していただいた鈴木智之さんに、筆者は次のようなお願をしています（鈴木 2017）。「少年犯罪の急増凶悪化、過剰報道と統計操作がもたらした、幻影であるという構築主義的批判が社会学の世界においては、支配的だった。その批判は正しい。しかし、凶行に走った少年たちが統計上の少数者であったとしても、彼らの犯罪が人々に大きな衝撃を与えたことも事実である。人々は事件の何に衝撃を受けたのか。それを少年犯罪言説の分析を通して明らかにしていただきたい」。統計的平均と外れ値。この両者の関係をどう考えるのか。これは若者論のみならず、社会学全般にとっての大きな課題であるといえます。

## （2）『若者論を読む』の後

『若者論を読む』の出版後には、筆者以外のメンバーは、若者論から活動の場を他の舞台に移していきました。岩佐君はタイと日本の地域メディアの研究。梅津君はスポーツ社会学。新井君は、バックパッカーやディズニールンド、さらにはポピュリズム政治の研究等、メディアと文化の関わりについて幅広い論考を重ねています。守弘君の研究対象も、主に日本のローカル・メディアや地域情報化の研究へとシフトしていきました。

『若者論を読む』を刊行した翌年には、守弘君が中心となって『情報化の中の私』が公刊されています。本書はメンバー的にも内容的にも、『若者論を読む』と重なる部分が多くあります。その後も、『若者論を読む』のメンバーに早川君を加えて、若者とメディアに関する本を出そうという話は持ち上がりましたが、成就することはありませんでした。2006年と7年には、若者に関する実証的研究で科研費を獲ろうとしましたが、かないませんでした。守弘君と一緒に調査研究ができなかったことは、いまでも残念に思っています。

守弘君は勤勉な研究者でした。そしてそれ以上に校務や教育には熱心に取り組んでいました。熊本学園大学の社会福祉研究所のスタッフとして、水俣

病の発見者である原田正純先生の、講演活動等のマネジメントの役割を、守弘君は担っていました。そのことに対して、2006年に熊本学園大学で開かれた日本マス・コミュニケーション学会のシンポジウムで、原田先生が謝意を述べておられたことを、友人として大変誇らしく思いました。2016年の熊本大地震においては、自らも被災しながら、大学の避難所の運営に尽力しています。守弘君は常に、縁の下の力持ち的な仕事を誠実に、そして正確にこなす人でした。

研究、教育、大学運営だけでも病身の守弘君には大きな負担となっていたはずです。後年は高齢のご両親の介護が、それに加わります。金曜日の夜間部の授業を終えて、飛行機で東京に向かい、月曜日の夜には熊本に戻ってくる。何年にもわたって、そうした生活を送っていたのです。守弘君にはもう少し自分の身体を労わって欲しかったと思います。終生独身を貫いたために、彼の健康を気遣う家族をもつことができなかったことが、いまさらながら悔やまれます。

先にもみたとおり、守弘君は趣味の人として、巨大な存在でした。定年退職後の彼が、研究や教育や校務から解放されて、その持てるエネルギーと時間とを趣味に注ぎ込めば、いったいどんなことになったのだろうか。それを思えば、守弘君の早すぎる死が、さらに悔やまれてきます。何年か何十年かの後に、あの大学院時代の仲間たちが守弘君のいまいる世界に集った時、筆者は彼の「押し屋」のパフォーマンスをみることを、楽しみにしています。

## 註

- (1) 一連の原子力船「むつ」関係の調査の成果は、(佐藤 1985) にまとめられている。
- (2) 「しらけ世代」が「就職超氷河期世代」の走りであったことは、(片瀬 2015) に詳しく論じられている。
- (3) 離島をも含めたケーブルテレビを中心とする地域メディアの研究が、守弘君の終生の研究テーマであったが、この領域について筆者は門外漢

であるので、守弘君の仕事の評価は他の論者に委ねたい。

## 参考文献

1. S De Grazia 1948 *The political community: a study of anomie* Univ of Chicago Press=1966佐藤智雄 池田昭訳『疎外と連帯 政治的宗教的共同体』勁草書房
2. 佐藤智雄編著 1985『地域オピニオンリーダーの研究』中央大学出版会
3. 笠原嘉 1977『青年期—精神病理学から』中公新書
4. 井上俊 1977『遊びの社会学』世界思想社
5. 小此木啓吾 1978『モラトリアム人間の時代』中央公論社
6. 中野収・平野秀秋 1977『円盤に乗ったコミュニケーション——コラージュ・現代文化』光風社書店
7. 三田誠広 1977『僕って何』河出書房新社
8. 守弘仁志 1981「地域社会における情報構造とメディアの機能—民間放送テレビにおける考察—」中央大学大学院文学研究科修士論文
9. 片瀬一男 2015『若者の戦後史』ミネルヴァ書房
10. 小谷敏編著 1993『若者論を読む』世界思想社
11. 守弘仁志 1993「情報新人類論の考察」(小谷編著1993 142-68頁)
12. 新井克弥・岩佐淳一・守弘仁志 1993「虚構としての新人類論—実証データからの批判的検討」(小谷編著1993 204-30頁)
13. 丸山眞男 1986『『文明論の概略を読む』岩波新書
14. 片桐編著 1989『意味と日常世界—シンボリック・インタラクショニズムの社会学』世界思想社
15. 森下伸一 1990 書評「意味と日常世界」ソシオロジ第35巻1号 1990年35巻1号126-31頁
16. 後藤和智 2008『「若者論」を疑え』宝島新社
17. 小谷敏編著 2017『21世紀の若者論 あいまいな不安を生きる』世界



思想社

18. 鈴木智之 2017 「このく世界＞の中でく他者＞と出会うことの困難—  
少年犯罪をめぐる社会学的論説から」(小谷編著2017 42-63頁)
19. 守弘仁志他著 1996『情報化のなかの「私」(社会と情報ライブラリ)』  
福村出版

**Morihiro Hitoshi and I**

— When we tackled to produce *Reading Narratives on youth* —

**KOTANI Satoshi (Otsuma Women's University)**

The late Professor Hitoshi Morihiro is my contemporary at graduate school of Chuo University. He wrought his master thesis on the local broadcasting system of Japan. Since then, he has devoted his life to the study of local media in Japan. However, he was very much interested in youth culture also. He was not only excellent sociologist but also a famous train spotter. In this article we will take notice to Morihiro as a researcher of youth culture. When I edited, *Reading narratives on Youth* he made a great contribution to the success of this book. In this book, he wrought two chapters. Based on empirical date, he criticized the narratives on youth prevalent in 1980s that young people were skillful in manipulating information equipment and had highly advanced media literacy. He was deeply anxious about that the narratives on youth of that time had left ordinary young people behind, paying too much attention to some sense elites. His two articles are valuable testimonies on one aspect of 1980's culture. While writing these articles, he fell grave ill. He couldn't overcome this disease for the rest of his life. And he passed away at the age of 63.